
奇人子爵の末姫

吉村 桃子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

奇人子爵の末姫

【Nコード】

N4605BA

【作者名】

吉村 桃子

【あらすじ】

「針ッッッ！持きたいの、針ッッッッ！！」

エルベリー家の末っ子ココット・エルベリーは縫い物が趣味…というより中毒。

あまりに趣味に没頭しすぎたため侍女に道具一式を取り上げられ禁止令まで出された。

そんな中、子爵の友人のパーティである男性とであったことでココットの

縫い物禁断症状が爆発する。

『あ の つ ー ー ！ その ボ タ ン 直 さ せ て く れ ま せ ん か ー ！ ！ ？ 』

そんな天然マイペース姫に恋をした不器用な鉄面皮伯爵の片思いストーリー。多分じれったいです。イライラするほどに。

奇人子爵の家族紹介

ヴォルフアラーナ王国の南東の端にエルベリー子爵領がある。

ヴォルフアラーナ大きく発展していく中でエルベリーだけが時代が止まったそんな感じのする昔ながらの農業の町。

そのエルベリー領を治めるロトノア・エルベリー子爵一家はヴォルフアラーナでも有名な家族だった。奇人子爵といわれるほどに。

家長ロトノア・エルベリー子爵は趣味が畑仕事。

対外的な仕事以外はすべて息子に任せ

朝から晩までマイ畑で土いじりに精を出す。

もっぱら自宅用だが出来がいいと領民に分けたりもする。

研究熱心なのか町に下りて農家の人間と良く話す。

普段から農作業スタイルでいつもどこかの畑にいるので他所から来た人間は領主はビルケットだと勘違いする。

長男ビルケット・エルベリーはボードゲームが趣味。

父親に押し付けられる事務仕事を適当にこなす

家人・客人問わずついでに時間も問わず

勝負を仕掛けいつか訪れるであろう最強王者(?)との

対決に備え日々鍛錬を積んでいる。

ちなみに本当に時間的配慮が無いため

道具を持って走り回るビルケットを見かけると

家人は大慌てで忙しく仕事をするフリをする。

1ゲーム1時間は離さないため。下々だって忙しいんです。

長女ルフィーナ・エルベリーは鍛錬が趣味。
特に剣術が得意だが最近は格闘術にハマっているらしい。
ふんわりとした髪、ぷっくりとした唇、豊かなボディ
女性としての魅力は抜群だがその肢体に魅了されていると
あつという間に対戦相手は病院送りにされてしまう。
ヴァルフアレーナ王帝騎士団から誘いがあつたものの
「同じ相手と鍛錬していると自分は強くなれない」と
断り続け世界のどこかで武者修行中である。

そして、この物語の主人公次女ココット・エルベリーは
裁縫が趣味。とにかく何か縫いたい。縫い物中毒患者である。
平面長方形の布をバサバサ切り、針で縫っていけば
イメージどおりの服が完成する。

「平面なものを立体的にするなんて魔法みたい！」
と能天気にかそこそ針仕事に精を出す。

…でも実は侍女に止められているのだ。

長女姫があんな状態なのでせめて次女姫だけでも真つ当な
子爵令嬢として育て上げるため道具一式を没収されてしまった。

縫い物禁止令を侍女頭タバサから出されて5日。

早くも禁断症状が出ている。針ツツ……針持ちたい……

ちなみにスマレ・エルベリー子爵夫人は15年前に他界している。
よそから嫁いだせいか彼女だけ真つ当な貴婦人だったのだが。

そんな田舎貴族エルベリー一家は今日もマイペースに興味に没頭する。

奇人子爵の家族紹介（後書き）

物書きマイブーム到来したので試しに書いてみました。

B型マイペースの私脳は本当気まぐれなので気長に待っていただけたらと思います。

天然×不器用　って最強だよね。

【1】 天上のパーティ

いくら趣味没頭したいからと職務放棄気味だからといって子爵という爵位を持つ以上責任と役目が発生する。

今日は仕事のような娯楽のようなそんな日。

“ご近所付き合い”ならぬ“貴族付き合い”の日。
レイザック侯爵主催のパーティである。

レイザック侯爵はエルベリー子爵の幼少のころからの友人である。どちらも表裏の無い人物だが
子爵が縁の下で茶でもするようなのんびり系なら
侯爵は屋外で大声張り上げて走り回るやんちゃな体育会系。

人の腹という腹、裏の裏の裏を探り合う
欲望の集合体のような貴族社会で

頭をめぐらすことなく思ったまま言い合い行動できる
そんな2人はすぐに仲良くなり半世紀以上友情関係を続けている。

そんな家族ぐるみで付き合いのある侯爵主催なので
エルベリー子爵も家族総出で出席した。

…あ、長女は連絡つかなかったんだった。

しかし、ココット・エルベリーは胸躍っていた。
去年社交界デビューしたもののこいつたパーティは
呼ばれなかったのである。なので今日がはじめて。

「ココ、少しは落ち着きなさい。」

そついうのは子爵子息ビルケット・エルベリー。
普段は柔らかな物腰なのに今日は公式な場だからか
淑女らしくないと厳しく妹を窘める。
でも、そんな兄様もココットは大好き。
大好きだけど、なんか兄様お父様みたい。

「だって、だって素敵なドレスがたくさん見られるのよ！
私だって最新のトレンドドレスとか知りたいわ。」

「…で、“帰ったら作りたいわ”？」

「……………うっ。だって、兄様……………」

「勉強2日サボタージュして
タバサに大目玉食らったのはどのレディだったかな？」

「う~~~~~~~~。兄様のイジワル。」

「あと25日の辛抱だ、眺めるだけにしなさい。
……淑女らしくけつつして凝視しないように。」

「む——————。」

完全に子ども扱いに拘ねたココットが
横で穏やかに微笑んでいた父に頭をなでられたところ
子爵一家を乗せた馬車はレイザック侯爵邸に着いた。

久しぶりに会うレイザック侯爵夫妻に

挨拶した後通された大広間には人で正確にはわからないけどものすごく大きい。でも、何よりその上で存在感を放つ立派で豪華なシャンデリアに目を奪われる。

…天の星々を集めたみたい。

王国の重鎮レイザック侯爵主催のパーティはそれはそれは絢爛豪華なパーティで初めて目にする圧倒的な光の空間にココットは感動のあまり言葉が出なかった。

人も、建物のすべても、もちろんお食事も空気までも華やか！

「すごいだろ。ここのシャンデリアはレイドック侯爵が奥方に結婚を申し込むために2年掛けて造らせた逸品なんだそうだよ。」

「プロポーズのために2年も！…それだけ大切な奥様なのね。素敵」

「ココはどうする？僕も知り合いに挨拶に行くけど、なんならそのへんで食べててもいいんだよ？」

「知らない人の中で一人きりされるのは心細いわ。だからついてく。」

「じゃあ、はぐれないよう僕の服でもつかんでおく？」

「…兄様、私そこまで子供じゃない。」

「よー！ビルケット。可愛い子連れてるじゃん。」

「ランバート相変わらず大きい声だな。妹だよ。妹のココット。ココ、コイツは…まあいいや…面倒だし。」

「いや！そこで面倒くさがるなよ。」

初めまして、ココット嬢。私はこの朴念仁の大親友ランバート・バレイアスと申します。

ビルケットが大切にする妹姫を
ようやく拝見することができ大変光栄です。」

「初めまして、ランバード様。ココット・エルベリーと申します。
あの…ランバード様、ルフィーナお姉様とお間違えでは…」

「いいえ、ココット嬢。」

ルフィーナ嬢には何度かお会いしたことがあるので
貴女で間違いありませんよ。いやあ、可愛い。

今日のダンスのお相…いたたたた！！」

ランバードが言い終わらないうちにビルケットに鼻をつままれ
言い争う2人。乱暴な言葉遣いの中に互いの友情のような

温かみを見つけ普段館にこもりきりの兄にもちゃんとお友達がいた
ようで

ココットは2人の掛け合いに笑いながらそのことが嬉しかった。

ココットを放置して2人が楽しそうに談笑するので

ココットは横で周りの女性たちのトレスチェックをすることにした。

今社交界で人気なのは刺繍入りのシフォン素材のドレスらしく

職人の業を結集した見事な刺繍を施した生地を
随所にあしらいい主に男性を魅了するためか

胸元をVの字または大きくスクエアカットにして豊満な
バストを見せていた。シフォン生地を使うことで

妖艶なの中に可愛らしさを出しアンバランスな

雰囲気で男性陣を魅了…しようとしているのかなと思った。

ココットもあそこまで露出はしていないが（主張する意味も…ボリ
ュームも無い）

いくぶんか肌を露出して兄様からもらったシフォン生地を使って作
ってもらった。

「裁縫禁止令」が出る前だったけどタバサが許してくれなかったか
らだ。

デザインはなんとか睡眠時間を（タバサに内緒で）削って作ったの
だが。

「あれ…」

そこで気づいた——兄様がない！！

周りを見回しても兄のビルケットや友人のランバートの姿が無かつ
た。

ビルケットにもプライベートがありランバートのような友人や
社交界での知り合いにでも会いに行ったのだろうと

探検に出ることにした。ファッションチェック一通りしたし。

小さな館には無い見事な装飾や名うての職人に作らせたであろう家具や建具などをみるのも面白かった。幸か不幸か声を掛ける人も居ないし、知らないお宅で食にがつつくのもどうかと思うし。

しかし綺麗だ。どれもこれも。

ふいに冷たい風が吹き横を見ると家具の陰になって見えないがバルコニーへ続く扉が少し開いていた。そこから月光に輝く噴水が見えたのでココットは誘われるままふらふらとバルコニーに出た。

異世界に入り込んだような幻想的なお庭でした。

廊下からも見えた大きな噴水を中心に迷路のような木が植えられていてしっかり管理されているだろう芸術的な庭園に魅了されていた。お庭散策していいかしら。

でも、あまり好き勝手すると兄様に叱られるし、

（この段階ではまだ兄の許容範囲だと思っているらしい）

あの迷路のようなお庭で迷子になっていたらそれこそ叱られるし…
（まだ自分は迷子だと自覚が無いらしい）

カサッ…

物音がしたので振り向くと一人の男性が壁にもたれかかっていた。何事かと思ったけど静かに立ち去るのを見て先客だったのかも。と思っていたのだが、

「あのっ…」

「……………」

「ボタン取れかかっています!」

「…? ああ、さっきの…」

取れそう、取れそう、取れそう、取れそう、取れそう、取れそう、
!!!!

ボタンが取れそうなのoooooooooooooooo!!!! (大・
興・奮!)

「あのっ!!! そのボタン直させてくれませんか!!!?」

【1】 天上のパーティ（後書き）

マイペース一家なのでココットも当然マイペース。

裁縫したい病の禁断症状が出ているのでかなり危険なテンションです（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4605ba/>

奇人子爵の末姫

2012年1月13日19時48分発行